



文脈

人は、単独では意味を持たない。

言葉も、出来事も、存在も、
それだけで完結しているように見える。

だが意味は、前後を失った瞬間に変わる。
変わるといふより、
はじめから定まっていなかったものが露出する。

文脈は、あとから足されるものではない。
だが、あとからしか見えない。

文脈は、補足ではない。
説明でもない。

単体で意味が成立するという前提が、
もともと存在しないという事実。

一文だけを見れば、攻撃になる。
沈黙だけを見れば、拒絶になる。

だがそれは、そう見えているだけで、
そうであるとは限らない。

人は、何も持たずに話すことがない。
だが、それが何かは見えない。

過去。

役割。

その日の体温。

言葉になる前の緊張。

それらは表に出ないまま、
すでに言葉に触れている。

影はあとから生まれるのではなく、
はじめからそこにある。

それでも、切り取られる。

一瞬だけが残り、
それ以外が消える。

消えたのではない。
見えなくされた。

そのとき、存在は縮まる。

誤解は、悪意の前に起きている。
起きてしまっている。

それでも、人は前提なしには存在できない。

完全に切り離された純粹な自己はない。
だが、文脈に固定された自己もまた、存在しない。

文脈は、意味を与える。
同時に、意味を閉じる。

ひらかれるために必要で、
閉じるためにも使われる。

見えているのは、出来事ではない。

…… 出来事だったものだ。



Edition — 存在の芯
別景：文脈

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026